

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書

平成27年4月10日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 人間・環境学研究科

職 名・学 年 博士後期課程3年

氏 名 佃 麻 美

助 成 の 種 類	平成 26 年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 在外研究長期助成		
研 究 課 題 名	中央アンデス高地におけるアルパカ毛の生産と流通に関する人類学的調査		
受 入 機 関 研 究 場 所	サン・アントニオ大学、クスコ市、ピナヤ村、シクアニ他		
渡 航 期 間	平成 26 年 6 月 13 日 ～ 平成 27 年 3 月 12 日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	1,500,000 円	
	使用した助成金額	1,500,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳	航空賃(ペルー-日本往復) 244,000円	
		航空賃(リマ-クスコ往復) 20,000円	
		バス賃 11,000円	
		予防注射料(狂犬病) 10,000円	
宿泊料 945,000円			
日当 270,000円			
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)		

報告者は2014年6月13日から2015年3月12日までペルー共和国南部高地において、アルパカ毛の生産と流通に関する人類学的な調査を行った。

アンデスには植民地時代以前から飼養されている家畜としてラクダ科のリヤマとアルパカがいる。アルパカは良質な毛と肉がその主な生産物である。リヤマは荷駄用として主に利用される。また両者の肉も重要な生産物である。牧民はキャラバンを編成し、物々交換の旅を行ったり農村を訪ねて収穫物の運搬にリヤマを使役したりして、農作物を獲得していたが、近年、道路網の整備と定期市の発達によりリヤマを伴った旅は消えつつある。一方、1960年代以降、アルパカ毛の国際市場における需要の高まりによって、アルパカの重要性は増しており、その品質改良が推進されている。

本研究の目的は、中央アンデス高地に位置する現代ペルー牧民村落においてアルパカ毛の生産と流通に関する調査を行い、グローバリゼーションのなかでどのように牧畜という生業が営まれているのかを明らかにすることである。国家や市場の動向が、村落という家畜を飼養し生産する現場にいかに関与を与え、その生業が再編されていくかについて分析するため、インタビュー、参与観察により情報収集を行った。

調査はペルー共和国クスコ県南部に位置するP村（標高およそ4500~5000m）と、そこへ向かう根拠地となる町S（標高およそ3500m）を中心に行った。P村は日常的な放牧など家畜を飼養する場である。P村の中心部までは町Sから未舗装道路が通っており、1日1便トラックが定期的に往復している。町Sは、村に人・モノ・情報が入ってくる窓口であるとともに、一部の村民はここにも家を所有し、子供の教育や家畜・畜産物の売買、家畜品評会への参加といった活動の拠点としている。

報告者は、P村においては可能な限り多くの世帯を訪問し、居住している家族の親族関係、飼養家畜頭数、利用している放牧地、家畜の品質改良をどの程度進めているか、アルパカ毛の販売状況などについて聞き取りを行い、同時に各世帯の住居の位置情報をGPS端末によって記録した。また、許可が得られた家族のもとには短期間住み込み、日々の放牧の様子や品質改良において重要な生殖管理をどのように行っているかについて参与観察を行った。町Sにおいては、家畜品評会の参与観察、村落の土地についての情報収集、アルパカ毛の集積・処理・販売・手工芸品製作を行う組織へのインタビューなどを行った。

P村には7つの地区にわかれており、標高が高いため農業は行われておらず牧畜が主な生業である。各家族は複数の住居を所有していることが多く、季節によって家畜とともに移動する。P村が位置する中央アンデス高地は、11~4月の雨季と5~10月の乾季に分かれており、乾季と雨季で住居をかえると答える家族が多かったが、さらに細かく時期を区切り移動する家族もいた。移動の理由として、乾季における水場の確保と草地のローテーションが挙げられた。1つの住居しか所有していない家族も少数ながらいたが、以前、土地が共有であった頃は他の場所へ移動していたという聞き取りから、かれらの移動形態には近年行われた土地区分が影響を及ぼしていることがうかがえた。また、ほとんどの家族が品質改良を行っているか興味を持っていると答えたが、土地の所有者に雇われて家畜を世話している「雇われ牧夫」の中には、品質改良を行っていないときっぱり答える者もいた。品質改良を行っている家族でも、改良にお

いて重要な生殖管理の方法には差異がみられた。これには改良方法をいかに学んだか、人手を確保できるか、また道路からの距離によって金網製柵囲いなどの改良に必要な物的支援を容易に受けられるかなど、多くの要因が複雑に絡まりあっている。

アルパカ毛の売却について聞き取り調査を行った結果、町Sの仲買人に売却している人々のほかに、村内でアソシエーションを組織し獣毛の輸出を試みようとしているグループと、協同組合に参加している人々が存在することが明らかになった。協同組合は、アルパカ毛の集積から紡績、輸出までを一貫して行っている。さらに手工芸品の製作・販売も始めており、仲買人に売却するよりも大きな収益をあげようと試みている。一方で、このような手順を踏むと実際に現金を手にするまでに時間がかかる。それに対して仲買人への毛の売却は、即時に現金収入を得られるという利点があることがわかった。アソシエーションは基本的には1つの地区の人々を中心に組織されているが、個人的な友人関係をも取り込みながら、その活動範囲を広げようとしている。協同組合の参加者は全地区におり、さらに別の村落にもまたがる組織である。アソシエーションも協同組合も同時に牧草の改善やアルパカの品質改良にも積極的に取り組んでおり、村落外の協力も仰ぎながら生産から流通までを一貫して積極的に改善しようと取り組み人々の姿が見られた。

今後、かれらの生業と外部世界との関わりをより綿密に明らかにするため詳細な分析を進め、統合的に検討していく。

最後になりましたが、このような調査の機会を与えてくれた京都大学教育研究振興財団に篤く感謝申し上げます。